

二〇二二年はコロナ・デルタ株感染者が増加し、八月初旬には、東京都で五千人、全国では一万五千人を超える感染者が出、累計総数六九万人に上って、緊急事態宣言下での状況が、東京オリンピックが終わるまで続いたことが、同人雑誌の動きにも反映された。

例年若者で賑わう同人雑誌の展示即売会「文学フリマ」は予定された八回のうち三回がコロナ禍によって中止された。

また、各同人雑誌においても、合評会や編集会議が思うままに開けず、郵送や電話で済ませる不便な状況となり、これによって合評会で鍛えられ、その後の飲み会など懇親によって関係を深める同人雑誌の機能の一つは減退せざるを得なかった。

また同人雑誌自体において作品の題材や特集にもその影響が前年よりいっそう色濃く見られた。類似した状況を想起してカミユの『ペスト』を中心にした読書会が催され、特集も編まれた。「群系」(東京都46号)では「いま、カミユ『ペスト』を読む」が特集され、座談会「コロナ・パンデミックの渦中に」を主軸に、七人が論考を載せている。『ペスト』は一五万部が増刷されたことにも言及してい

る。

一方で、都市部の飲食店の時短制限が続き、旅行や外出が控えられる中で、SNSやインターネットでコミュニケーションを図る時間は逆に長くなり、ヴァーチャル空間やそれによる読書も創作も膨張している。小説投稿サイト「小説家になろう」は、小説掲載数が九二万(十二月二十三日現在)を超え、作品登録ユーザー数は二八万(十二月二十三日現在)という驚くべき数字に上っている。「カクヨム」投稿サイトもユーザー数は公表していないものの、増加している。これらの掲載作品は親しみやすく、呼びかけや癒しを含んだナイーブさはあるが、やはりレベルは総じて低く、空想的で、普遍的な文学作品としての強度やインパクトを持つものはほとんど見られない。ただ、こういう領域から、突然変異的な傑作が登場することはあり得ないことではないだろう。

この世界に、画期的な新サイトが登場した。「AIのべりすと」は、これまでの投稿サイトとは違い、小説を人工頭脳AIの力で書いてくれる、文章創作サイトである。有料だが、一定の素材や文章を入れるとそれを基に、小

説を組み立ててくれたり、書きを書いてくれたりする。作家パターンがあり、夏目漱石、芥川龍之介、太宰治などに加え、紫式部やコナン・ドイル、シェイクスピア、ドストエフスキーまで十七人の文章パターンが選べる。どのパターンの作家を使うかで、かなり変わってきてしまうのだが、とにかくこれで作品がなんとかできてしまうのは、驚きである。日経星新一賞でこのAIによって作った小説が初入選し、話題を呼んだ。またこの賞では、人間以外が加わって作った作品が応募の四パーセントまで増加しているのも注目を集めている。またこのサイト自体の「AIのべりすと文学賞」も設けられた。現在のところ、成功例は短編小説に限られ、これが一般の文学賞に通用するかどうか、長い作品として成立するかどうかは未知数であるものの、AIとの共同創作という書き方は、今後いっそう増えていくことが予想される。AIの力を借りての創作が創作と呼べるかどうかを含めて、文芸界にインパクトを与えることは間違いない。映画の原作などは、この作り方が有効であるという報告もある。

コロナ禍によって、合評会が中止になる

ケースが増え、同人誌の運営自体が難しくなっている側面もあるが、逆にこれによって新たなコミュニケーションツールが台頭し、これまでにないシーンが生まれている。ZOOMなどインターネット回線による動画画面でのコミュニケーションを特に若い世代の同人雑誌の書き手が多用するようになり、それぞれ家にながら、合評会や会議が可能になった。このことによって、各地域ごとに集まっていた同人は、日本全国での同時コミュニケーションが可能になり、同人は地域に限定されることなく、オンライン上での全国的な、場合によっては世界的な参加が可能になった。同人は、各県や各地域を基盤とするのではなく、パソコンやスマホによる全国的な創作グループとしての結び付きが可能になった。

二〇二二年の特筆すべき同人雑誌の動きとしては、四月二十日、同人雑誌の全国組織「一般社団法人全国同人雑誌協会」が設立されたことである。これは二〇一九年秋に開かれた第三回全国同人雑誌会議において提議され、討議・アンケート賛同を経て、法人として設立されたもので、活字文化の低迷と衰退を、底辺からの書き手自身によって活性化し日本文学の基盤を強化する趣旨に賛同した作家、文芸評論家が、多数参加した。名譽顧問に加賀乙彦氏、顧問に勝又浩、三田誠広、川村湊

富岡幸一郎、中上紀各氏、参与に高橋三千綱(八月逝去)、岳真也、伊神権太各氏、名誉会長に中部ペンクラブの三田村博史氏(文芸中部)「主宰」が就任した。これを受けて緊急事態宣言が解かれた十月三十日、東京TKPガーデンシティお茶ノ水において第四回全国同人雑誌会議と併せて第一回全国同人雑誌協会総会が開催され、実質的なスタートを切った。日本文藝家協会、東京新聞、中日新聞、「三田文学」、「季刊文科」の後援を得た総会は、基調講演に赤川次郎氏が「小説稼業事始め」をスピーチし、その中で「どうして今までこういう協会がなかったのか不思議ですね」とも率直な感想を述べた。

また協会は、同人雑誌振興の基軸として、これまでの作品賞「まほろば賞」賞金を三十万円に引き上げると同時に、同人雑誌そのものに授与する「全国同人雑誌大賞」を設けた。さらに勝又浩氏の提言により新興雑誌に光を当てる部門「新同人雑誌賞」を設け、消えていくことも多い新同人雑誌を奨励した。

二〇二二年第一回「まほろば賞」は、当選作に「破れ蓮」(飯田芳「じゅん文学」104号/愛知県)、特別賞に「狐火」(渡辺光昭「仙台文学」95・96号/宮城県)、三田誠広賞に「夢の岸」(鴨居諒「中津川文芸」5号/岐阜県)、河林満賞は「しずり雪」(小網

春美「飢餓祭」46号/奈良県、読者賞は「負け犬」(瀬崎峰水「ふくやま文学」32号/広島県)で、総会第二部において表彰された。「全国同人雑誌賞大賞」初の当選は月刊で679号という継続が評価された「北斗」(愛知県)が選ばれ、特別賞に「文芸復興」(東京都)と「仙台文学」(宮城県)、奨励賞に「たまゆら」(京都府)と「南風」(福岡県)、また新同人雑誌賞に「文芸エム」(滋賀県)、新同人雑誌優秀賞に「前衛アンソロジー」(愛知県)がそれぞれ選出され、表彰された。

後半の「同人雑誌の全国展開に向けて」と題したシンポジウムでは、「三田文学」「季刊文科」の優秀作品の選出方法や各地域からの報告とともに、「文芸エム」のZOOM動画通信による合評会がスクリーンで実写され、新しい合評会形態が注目された。

新協会は、まだ滑り出したばかりで、その展開は未知数だが、高齢化など課題をかかえた同人雑誌界にとって新たなモータメントとなる期待がかかっている。

神戸エルマール文学賞は「カム」(大阪府)18号の後藤高志「あともうひとつ」が受賞した。妻が自分を愛さなくなった現実を前に戸惑う現代の愛情状況を淡々と描いている点が評価された。

同人雑誌作品別では、「よもつ耶」(更待月のこと)(海邦智子「札幌文学」91号/北

海道)が、不遇の人生をそれぞれ抱いて死のうとする人々をあの世へ送るタクシー運転手の設定が、諦念の中にきれいな音色を奏でている。また「水水母」(木山葉子「木木」33号/佐賀県)は、夫が過去の女性のたくさんみ紙をずっと保存している違和感に長く悩み続けたしこりが水母の死骸に重なって融解していく心象を緻密な文体で描いている。

老人問題を扱った作品は多く、まほろば賞の「破れ蓮」も介護による母殺しを題材にしているが、視点において注目すべき作品も少なくない。「法殺考」(波佐間義之「九州作家」134号/福岡県)は、八十五歳以上の重度介護老人は医療によって安楽死させてもよいという法律が国会で成立し、それを実行する医師の内面の葛藤を描いている。切っ先はやや浅く、国会での成立過程は描かれていないが、年々増え続ける老人医療費の果てとして

あり得なくはない提起の鋭さがある。「鴉(紺野夏子「南風」48号/福岡県)は、失踪した父親を最晩年に訪ねるなかに、鴉と仲良くしていた父の寂寥の姿が浮かび上がる。

関西で巻き起こっている同人雑誌の新旋風も、新鮮な筆致を展開している。「鉄棒の前で」(水無月うらら「コゴドコ」2号/大阪府)も文章の爽やかさやセクハラ教師の記憶を辿る題材の今日性は、卑近な快さがある。

同人雑誌には、記録レポートや評伝のジャンルにも豊かさが見られる。「新生」(東京都)15号は重要な知識や思考を含み、示唆に富んでいる。「風に吹かれて」(4)ヨットと水素利用(松尾晃)は船の未来をエネルギー問題から説いて、有益な未来性を提示している。篤一夫の巻頭言も一流紙の社説以上の高邁な、鋭い観点を備えている。「詩魂漂漂」(松田一美「飛行船」27号/徳島県)は歌人塚本

邦雄の足跡を師への哀惜とともに克明に追った力作で、現在失われつつある短歌の真の魂に迫る鋭利な評伝となっている。

「人間像」(北海道)、「法螺」(大阪府)など終刊となった老舗同人雑誌も目立ったが、一方で「響」(富山県)、「REBOX」(愛知県)など創刊された同人雑誌も少なくない。コロナ禍によって逆に電子媒体の新しい繋がりがやリモート合評会の可能性が広がり、これまでにない動きを孕んでいる。全国同人雑誌協会の新組織が誕生したことも、新たなムーブメントを呼びよせかけになるかもしれない。商業文化誌が凋落傾向にあるだけでなく、活字文化全体が混沌している現在、底辺からの表現衝動に期待を寄せる声も少なくない。

（いがらし・つとむ 作家/全国同人雑誌振興会）

「文藝年鑑 2022」

日本文芸家協会編

発行 新潮社

2022年6月30日発行

本体4400円(税別)